

## 『マタピラでの日々』

「*Muli bwanji?* (お元気ですか)」私はマラウイ共和国の首都、リロングウェ郊外のマタピラという村に住んでいる。JICAの青年海外協力隊でこの村に派遣され、学区の小学校12校を自転車で巡回しながら芸術教育の企画やアドバイザーをしている。太鼓や楽器、クレヨン、自然の材料などを用いて子供たちとアートクラブの活動をしたり、教員と協力しながら手作りファッションショーをしたりなどと忙しい日々だ。

マラウイは別名「The warm heart of Africa」と呼ばれる平和で人々が優しい国として知られている。その別名の通り、近所の皆に、生きるために必要な鍬の持ち方から畑の耕し方まですべて教えてもらって、助けてもらいながら村暮らしを楽しんでいる。

村唯一の外国人だから、私のことを皆が知っている。ユキノ、という名前だが、*Chikhulupiro*とも呼ばれる。同僚がつけてくれたチェワ語の名前だ。私を見つけると皆が声をかけてくれる。「ユキノ、こっちにおいで!」「*Chikhulupiro, Bhubho?*」遠くの方からでも、手招きをされたら行かなくてはならないのがこの村のマナーだ。畑の畝を跨ぎながら呼ばれた方に行くと、「*Muli bwanji?* ご機嫌いかが?」「家はどう?」「家族はどう?」と長い挨拶をする。とくに用事があるわけではないのだが、この長い挨拶がマラウイではとても大事なコミュニケーションなのだ。学校に行く時、野菜を買いに行く時、井戸に水を汲みに行く時、どんな時でも、声をかけられ、長い挨拶をする。一つ一つのことに時間がかかるが、それでいい。この村ではそれが当たり前なのだ。

ある日いつも通り学校に行くと、なんだか子供達がそわそわしている。聞くと、近所の村で「グレ・ワンクール」があるらしい。グレ・ワンクールとは、直訳すると「ビッグダンス」だ。お葬式や、新しい村のチーフの就任式の際に、仮面を被った秘密結社のグレ・ワンクールのメンバーがやってくる。そして布をたくさん垂らした手作りの奇抜な衣装で、太鼓の音色に合わせて踊るのだ。秘密結社のメンバーは異界からの使者のようなもので、お葬式の時には、死者を楽しくあの世に送る、という意味があると同僚のバンダ先生が教えてくれた。

グレ・ワンクールは秘密結社だからメンバーは正体がバレてはいけない。仮面をかぶっているから中身は誰かわからないのだが、おそらく近所の誰かだ。秘密結社では、「飛行機に乗らずに空を飛ぶ方法」みたいな秘密を共有したり、呪術の使い方を学んだりするらしい。土着宗教でもあり、伝統芸能でもある。

村では特に教員や医療関係の人々にはクリスチャンの人々も多く、学校の近くに教会もある。彼らは「グレ・ワンクールは信じない」と言っているが、伝統芸能として人々の生活に深く関わっている。

学校一のひょうきんもののフラックソン on という6年生の男の子は、グレ・ワンクールが大好きだ。絵の授業では、いつもグレ・ワンクールのイラストを書いているし、伝統ダンスの授業ではいつも太鼓係を率先して引き受けている。学校の壁に壁画を描くプロジェクトの際にはデカデカとグレ・ワンクールの絵を壁に描こうとして先生に止められていた。フラックソンはグレ・ワンクールの情報はいつもいち早くキャッチし、この日は私に「セレンゴ小学校の近くでグレ・ワンクールがあるよ」と教えてくれた。

グレ・ワンクールは、娯楽の少ない村では重要な楽しみとなっている。テレビのある家も少ないし、そもそも電気の通ってない家が多い。映画館と呼べるようなものなんてなく、藁の囲いの中に古いブラウン管のテレビがあって飲んだくれのおじさんたちが集まるようなテレビ小屋しかない。だからこそ、グレ・ワンクールがある日には、弾ける太鼓の音色とダンスに子供たちはワクワク、ソワソワ、楽しみで落ち着かないのだ。

学校が終わって、午後みんなで歩いて40分ほどのセレンゴ小学校近くの村に向かった。村の新チーフの就任式があるそうだ。広場に着くと、すでに太鼓の音が聞こえ始めていた。

何重にも重なる人々の輪の中に、派手な色の衣装を着たメンバーたちがいた。仮面を被り、手作りのかつらや装飾で身を飾った彼らは、とても目立つ。滑稽だが、恐ろしくもある。太鼓係が太鼓を叩き、村のおばさんたちが横で歌うと、彼らは全身で鼓動を弾けさせ、踊り始めた。観客は大盛り上がりだ。第一グループが踊り終わると、第二グループ、第三グループと様々な姿をしたメンバーたちが出てきて踊り始める。メンバーは、種類によって様々な名前がついており、「Nyau (ニャウ)」と呼ばれることもあれば、竹馬のようなものに乗って特別背が高いメンバーは「Makanja (マカンジャ)」、バナナの皮の衣装を着たメンバーは「Kwakwase (クアクァセ)」と呼ばれたりする。踊りがうまかったり会場を盛り上げたメンバーには、観客がお金を渡しに行く。投げ銭方式だ。

踊りも佳境に入ると、大きなライオンが出てきた。「Mkango (ムカンゴ)」という。もちろん本物ではなく、中にふたりの人間が入った手作りのライオンだ。迫力がありながらも、油性ペンで目や口が書いてあったりとどこか滑稽である。≪最近ではなんと、飛行機を模したものが出てくることもあると聞いた。ふさふさの毛を揺らしながら踊る様にみな夢中になる。

一通りダンスが終わると、メンバーは子供や女性たちを追いかけ怖がらせたり、お金を要求したりし始める。みな捕まらないように逃げるのだが、メンバーに追われて大泣きする子供も多にいる。グレ・ワンクールは畏怖と憧れの対象なのだ。

一通りグレ・ワンクールが終わったので、日が暮れる前に皆で歩いて、マタピラに帰った。家について眠ろうと目を閉じてても、グレ・ワンクールの興奮がまだ体に残っていて、なかなか眠れない。

次の日、日の出とともに起き学校を巡回すると、先生たちは私がグレ・ワンクールを見に行ったことを知っていて、どうだった？と聞いてきた。「楽しかったよ」というと嬉しそうだった。

仕事が終わってへとへとになって家に着くと、うちの庭に50人ほどの子供達が私の帰りを待ち構えていた。「太鼓を貸して！」「一緒に踊ろう！」子供達の熱も冷めていないのだ。どんなに疲れていても、子供達の輝く目に宿る期待を無視することはできない。みんなで踊っているうちに、辺りが暗くなってきた。そろそろ帰る時間だ。

今日は月が明るい。懐中電灯がなくても歩いて帰れそうだ。